2018 年度中央大学共同プロジェクト　研究実績報告書

１．概要

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">研究代表者</td><td>所属機関</td><td colspan="2">法学部</td><td>2018 年度助成額</td></tr>
<tr><td>氏名</td><td colspan="2">一政　史織</td><td rowspan="2">2,404（千円）</td></tr>
<tr><td>NAME</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">研究
課題名</td><td>和文</td><td colspan="2">19 世紀から 20 世紀北米における移民をめぐる規制と移民コミュニティの変容</td><td rowspan="2">研究
期間</td><td rowspan="2">2017 年度
～
2019 年度</td></tr>
<tr><td>英文</td><td colspan="2"></td></tr>
</table>

２．研究組織

※所属機関・部局・職名は 2019 年 3 月 31 日時点のものです。

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	一政 史織	中央大学・法学部・教授	研究統括、理論（社会学、文化研究）、移民をめぐる米国の世論や社会運動、移民たちのトランスナショナルなメディア活動や社会運動	研究代表者
2	小田　悠生	中央大学・商学部・准教授	米国の移民政策、政府関係資料、NGO 組織の資料の収集、分析、人権概念の変容の検証	研究分担者
3	和泉　真澄	同志社大学・グローバル地域学部・教授	米国、カナダの日系人史、社会・文化史、新たな史料の発掘、聞き取り調査、移民の主体的な経験や語りの収集と分析	研究分担者
合計　　3　名				

３．２０１８年度の研究活動報告

（和文）

I.　本研究の目的と今年度の研究目的の概要

本研究は、送出国から受入れ国へと移動し定住していく一元的で一方向な移民過程の描写や移民管理の成否の議論ではなく、より幅広く多様な視点から、移民をめぐるトランスナショナリズム、人権、移民の主体的な戦略やコミュニティの変容を検討することを目的としている。また、特定の移民集団、国民国家などの枠組みにとらわれずに、共同研究者が扱う様々な事例研究や理論研究を統合することで、アメリカ合衆国、カナダの移民たちの歴史を多角的に読み解こうと試みている。

以上の研究目的のために、本年度の研究では、各自の事例研究の調査、分析を進めるのと同時に、共同研究者間の情報交換、研究交流を促進し、移民や移民管理に関連する研究、理論、政策等を整理し、批判的に理論を構築しようとした。また、各自が、移民や移民に関わる人々の経験や記憶を記述することで、実証的かつ多元的な視点からグローバルな人の移動を俯瞰し、その歴史の共通性を叙述しようと試みた。

II.　2018 年度の国内、国外での共同研究活動

本年度は、昨年度に引き続き各自の研究の進展について活発に情報交換を行った。まず、人文研「南北アメリカの歴史、社会、文化」チーム（主査　一政（野村）史織）を利用して、メンバーが定期的に集まり、テーマについて意見交換や研究打ち合わせ等をおこなった。(開催日は、2018 年 5 月 31 日、10 月 27 日、11 月 20 日、1 月 26 日、2 月 22 日）詳細は小田が作成した HP（https://sites.google.com/view/americas-jinbunken-chuo/home）参照のこと。)

また、本共同研究メンバーは、アメリカ学会、OAH 共催で日米友好基金後援の今年度の招聘プログラムの受け入れ研究者として、その企画、運営、研究会や公開授業の開催等に関わったが、その折に、学内外への情報発信に努め、また、研究教育へ本共同研究の成果も還元されるように努力した。具体的には、アメリカ学会、OAH, 日米友好基金の後援により、Prof. Katherine Benton-Cohen (Georgetown University), Prof. Bethel Saler (Haverford College)による、本学（法、商、文各学部での学部生向け講義、人文研公開研究会、研究交流会等)、アメリカ学会年次大会（北九州市立大学)、同志社大学（特に和泉の協力による)、アメリカ太平洋地域研究センター（東京大学）での数回にわたる講演やシンポジウムを実施した。また、この過程で、共同研究のメンバーが本務校で実施している「移民」や「アメリカ史」の講義をお互いに参観した（5－6 月)。

さらに、Katherine Benton-Cohen と共同研究者 3 名による Organization for American Historians (OAH)年次大会（2020 年 4 月開催）での共同発表に向けての打ち合わせ等を開始した。Cohen が OAH の招聘プログラムで来日中の 5－6 月に東京、京都でまず情報交換をした上で、9 月 6 日に小田が米国で Cohen と研究について意見交換を行った。その上で、11 月 2 日に駿河台記念館で和泉、小田、一政で研究打ち合わせを実施した。その後、メール等で情報交換を続け、パネルタイトル“Emergence of Immigration “Specialists: Ideas about Inclusion and Exclusion of Immigrants in the Early- to Mid-20th Century”で共同パネルのプロポーザルを 2019 年 1 月に OAH に提出した。本パネルは、**共同研究の最終成果として、アメリカで最大の歴史学会である** Organization of American Historians **年次大会**(2020 **年** 4 **月** 2 **日**- 5 **日、於アメリカ合衆国ワシントン** DC)**にて、**Katherine Benton-Cohen 教授を**司会・討論者**とする**パネル報告の形で**発表するものである。

III.　各自の研究の進展と共同研究への寄与

以下、共同研究全体に寄与する形で、各自の研究がどのように進められたのかを記す。

①　一政（研究代表者）は、移民研究の動向をまとめ、特に、近年議論の高まりを見せている移民や移民をめぐるメディア活動や社会運動を「トランスナショナリズム」の視点から議論する役割を負っている。2018 年度は、移民との関わりも深く、また、その運動家たちが移民をめぐる社会学理

論構築や世論形成に深くかかわった社会改革運動であるセツルメント運動や婦人国際平和運動に注目した。特に、アジア系移民のうち日系移民のケースと、東欧系やアジア系移民の中で活動を行った白人中産階級の女性たちの社会運動をケーススタディとして取り上げた。

昨年に引き続き、本年度も、20 世紀初頭の移民コミュニティに対する女性たちのセツルメント運動について、多くの基礎的な文献や資料を収集することができた。全米セツルメント連盟に関する 1899 年から 1958 年までの議事録、報告書等の活動資料等のマイクロフィルムを予算の範囲内で収集、データ化し、また、移民支援から国際婦人平和運動へと発展していったセツルメント運動家についての資料も収集した。

この研究、調査の過程で、日系移民女性については、日本のメディアにおいて、在米の日本人移民女性たちのコミュニティでの役割や生活改善について報告する投稿や手紙がどのように利用されたのかについて分析することができた。成果は、英語論文として中央大学英語英米文学会の『英語英米文学』(2019 年 2 月発行) に発表した。また、セツルメント運動と移民については、マサチューセッツ州やペンシルヴェニア州での東欧系、南欧系移民に対するセツルメント運動に、白人中産階級の女性たちがどのようにかかわっていったのか、個別のケースで検証することができ、その成果を、『中央大学人文研紀要』に論文として投稿することができた。

学会活動にも積極的に参加し、運営委員として 9 月の日本アメリカ史学会の年次大会のパネルの企画、運営に関わり、小田らの研究発表パネルの司会を務めた。

② 小田 (研究分担者) は、人種やエスニシティの視点から、二十世紀から現代にかけてのアメリカ合衆国の移民政策全般を精査する役割を負っている。特に、人権概念の変容に注目することで、移民政策史の再検証を試みている。この目的のために、本研究プロジェクト期間を通じて立法府と行政府を中心とした連邦政府史料、人権団体や移民支援団体をはじめとした NGO 資料の収集を本年度も継続して実施した。

2018 年 8 月 26 日 - 9 月 10 日、アメリカ合衆国国立公文館(アメリカ合衆国ワシントン DC)での資料調査を行なった。昨年度実施したテキサス大学オースティン校(アメリカ合衆国テキサス州オースティン)における資料収集では、20 世紀におけるマイノリティ・移民の権利獲得・保護運動についての研究を進めるにあたり、民間団体に焦点を絞り複数のラティーノ団体の史料を渉猟した。今回の調査では、連邦議会の資料と移民法執行機関の資料を収集したことで、民間団体と政府の関係の変遷についての検討を深めることができた。ワシントン DC 滞在中には、研究協力者である Katherine Benton-Cohen 教授(Georgetown 大学歴史学部)との打ち合わせを 9 月 5 日に行なった。OAH のパネルについて、また、進行中の研究について同教授の大学院セミナー (9 月 5 日) で報告し、コメントをもらった。また、同 9 月末には、日本アメリカ史学会で研究発表を行った。

③ 和泉(研究分担者)は、「移民の経験や語りコミュニティの変容」という視点から、日本からアメリカ・カナダへの移住者とその子孫(日系人と総称)の体験に関して、特に移民一世や帰米二世、帰加二世などを中心として、草の根の移民個々人の声を集める役割を負っている。そのため、和泉は、研究期間を通じて史料の発掘、聞き取り調査を進め、また調査結果の発表を行っている。2018 年度は、昨年度に引き続き、カナダ日本人移民の研究のうち、研究が手薄になっているカナダから日本に第二次世界大戦前に帰還した人々、および 1946 年にカナダ政府の国外追放政策の対象となり、日本にやってきた人々に関して、個人史を中心に資料収集を継続するとともに、研究成果を社会に還元する活動の支援を行なった。

まず、和歌山県からバンクーバーへ移住し、カメラマンとして活躍したイズミ・ジョン・タダオ氏は戦後の国外追放で家族とともに来日し、そのまま日本に定住した。イズミ一家の帰国後の生活についての聞き取りを、バンクーバー生まれの娘であるメグミ氏とエミコ氏から 2018 年 5 月および 2019 年 2 月に枚方市で行なった。また、昨年度に引き続き伊吹三樹雄氏のライフヒストリーの聞き取りを行なった。

海外活動としては、7 月には、カリフォルニアの戦時隔離収容所であったツールレイク収容所跡地の巡礼

および研究会に参加した。2019 年 2 月には、小説『ノー・ノー・ボーイ』の作者である二世のジョン・オカダに関する講演会、および強制収容に対する戦後補償運動の中で自らの体験を語り始める困難さとその克服の過程を描いた演劇『The Tales of Clamor』観劇と分析などのフィールドワークを行った。これらのフィールドワークをもとに、今年度も学会などで日系人関連の成果発表を活発に行うことができた。また、日本移民学会年次大会ラウンドテーブルの企画、モデレータとして、日本移民学会年次大会ラウンドテーブル「国立国会図書館の活用－憲政資料室の日系移民関係資料について」（南山大学、2018 年 6 月）を開催することもできた。

以上のように、各自の研究を発展させながら、それらを統合する形で、今後もグループでの学会発表（国際学会でのパネル発表、ワークショップ等）、互いの研究成果や著書の合評会を続けていきたい。

（英文）

The purpose of this research team is to examine the concepts of nation, race and citizenship by analyzing the changing transnational socio-political, economic and cultural contexts of immigrants in the globalizing world as well as by exploring their individual life history. In particular, we look at various regulations on emigration/immigration as well as many supporting systems for immigrants. We try to describe the impact of these contradictory factors on the formation and transformation of immigrant communities in North America since the late 19th century.

We have been conducting collaborative research and making an effort to integrate theoretical and empirical research practices. This year, we had many study meetings to discuss issues. In particular, we supported the 2018 OAH/JAAS short-term residency program (sponsored by JAAS, OAH and JUFSC) and hosted Prof. Katherine Benton-Cohen (Associate Professor, Department of History, Georgetown University). We organized six talks and lectures at Chuo University (Tokyo), Doshisha University (Kyoto), the University of Tokyo (Tokyo), and at the annual conference of the Japanese Association for American Studies held in Kitakyushu-City (Fukuoka), travelling widely from Eastern, Western to Southern Japan. Prof. Bethel Saler (Haverford College) who was another OAH/JAAS short-term residency scholar also gave a talk at Chuo. These opportunities became a good starting point of a lasting scholarly exchange between scholars in the U.S. and Japan.

Through organizing and attending these study meetings and visiting classes taught by other members, we discussed many issues of American society and history, had active communication each other, and deepened our knowledge about the history of immigration to the United States. In January 2019, we submitted a proposal, “Emergence of Immigration “Specialists: Ideas about Inclusion and Exclusion of Immigrants in the Early- to Mid-20th Century”. (Ichimasa, Oda and Izumi are participants to present papers and Prof. Cohen is a commentator and chair.) Through a relational and comparative lens, the panel will explore historical ideas about the inclusion and exclusion of immigrants. As for each member’s research achievements, see the list below.

４．主な発表論文等（予定を含む）※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

【学術論文】《著者名、論文題目、誌名、査読の有無（査読がある場合は必ず査読有りと明記してください）、巻号、頁、発行年月》
1．Nomura-Ichimasa, Shiori, “Japanese Women in the U.S. and the Formation of Japanese Gender Discourses: Depictions of *Ryosai-Kenbo* (Good Wife and Wise Mother) in Japanese Women's Magazines”, 『英語英米文学』（中央大学）、第 59 号、2019 年 2 月、87-111 頁。（査読なし）
2．一政（野村）史織「19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカ合衆国における女子高等教育とソーシャルワーク―エミリー・グリーン・ボルチの教育と活動を中心に」、『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）、2019 年 9 月刊行予定。（査読あり）
3．Oda, Yukki, “Katherine Benton Cohen, *Inventing the Immigration Problem: The Dillingham Commission and Its Legacy.* (Cambridge: Harvard University Press, 2018)”, *H-Diplo*, *Humanities and Sciences Online,* April, 2019.（書評論文）（査読なし）
4．Izumi, Masumi, “Gila River Concentration Camp and the Historical Memory of Japanese American Concentration Camp,” *Japanese Journal of American Studies*, 29, 2018, pp.67-87.（査読あり）
5．和泉真澄「イエローパワーの音楽」を超えて―日系アメリカ三世、ノブコ・ミヤモトのコミュニティ活動と音楽の変遷」『GR（同志社大学同志社大学グローバル地域文化学会紀要）』（同志社大学）、12 号、2018 年, pp.101-132.（査読あり）

【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）
1．Oda, Yuki,“Mexican American Repatriation and Citizenship Cases”, Organization of American Historians, Annual Conference(2018 年度年次大会),Sacramento(CA), USA(アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメント市)、2018 年 4 月。
2. 小田悠生「イミグレーション・フェデラリズムとイミグレーション・ローカリズムの過去と現在」、「「ヘイトの時代」に考える移民・難民保護のポリティクス」、日本アメリカ史学会年次大会第 15 回年次大会，日本女子大学、2018 年 9 月。